

昭和四十年年度史学研究会大会

一月一日(月) 二日(火)

第一日見学会「京都の伝統をさぐる」は、京都大学教授柴田実氏の懇切な解説のもと、京都の伝統を形成する重要な要素である産業と美を求めて、北山丸太の森林及び作業場、西陣織川島織物工場、表千家不審庵、手がき友禅染絵付作業場、島原角屋を巡回し、「京都の伝統」について認識を新たにした。京都の伝統を云々するとき、これらはしばしば紹介されるものでありながら、個人ではなかなか見学できぬものであるだけに、非常に好評で、例年通りのバス一台のほかマイクロバス一台を追加したが、御要望には応じきれなかった。やむなくおことわりした各位に対し、あらためて深くおわびする。なお不審庵にては、会員久田宗也氏の歓待をうけた。誌上を借りてあつく御礼申しあげる次第である。

第二日総会および大会は、午後一時より、京都大学文学部第一講義室において開催

した。

総会は、豊田堯理事司会のもと、田村実造理事長の挨拶について、織田武雄常任理事より、会務および会計の報告が行なわれた。

公開講演は、京都大学教授福山敏男氏および同貝塚茂樹氏により、次の通り行なわれた。

秋田男鹿の発掘

——平安時代の民家——

福山敏男氏

八郎潟に面する男鹿半島東部には縄文式前期から土師器・須恵器時代にいたる数多くの遺跡がある。男鹿市大字脇本の埋没家屋もその一つである。

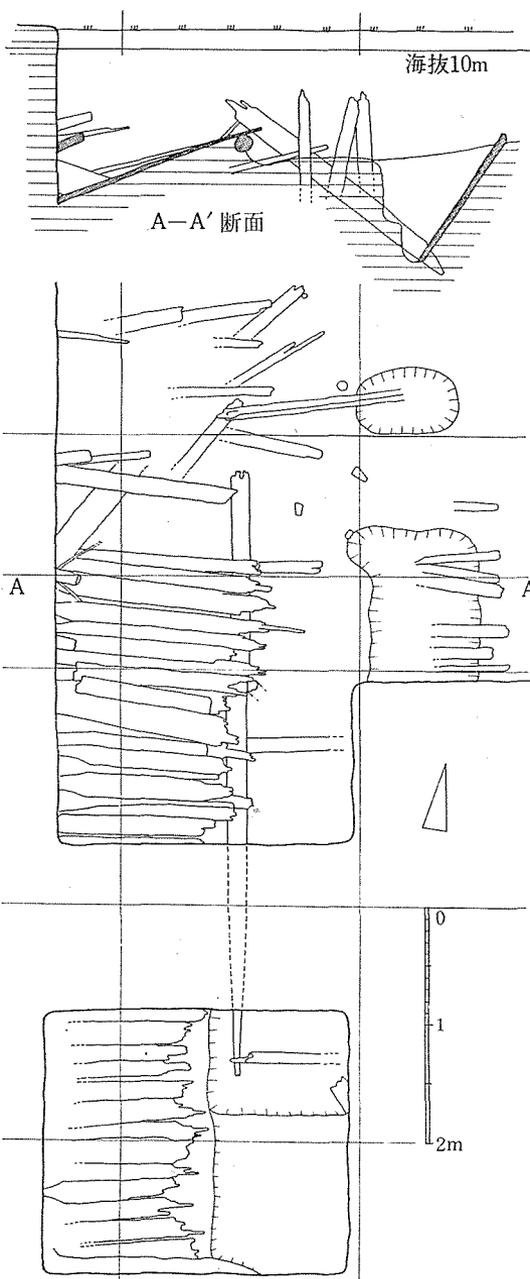
この地方の歴史を知るべき文献資料はとぼしい。元慶二年(八七八)の出羽の蝦夷の反乱のとき、主として秋田城以北にあって蝦夷の手中におちた十二村の一つ「版本」が三代実録に記されている。これが今の脇本の地であれば、ここは蝦夷の出没した秋田城下の一村であったことになる。なお後記の脇本の小字飯ノ森について肥前国渋江

文書延応元年(一二三六)六月沙弥公蓮談状に「をかしま(男鹿島)のうち井のもり」(飯ノ森)とあるものに当たると考えられている。^②

江戸時代以来、寒風山麓の脇本から東八郎潟にいたる一帯の水田の地下から樹木の根幹(根本)が掘りだされ、燃料にされてきた。古くこの地が陥没したのである。民家も村も樹木と運命をともにして陥没し、八郎潟と一連の水の中につかり、次第に泥土が堆積し長年月を経て再び陸地となり、結局遺構は水田の地下に保存されることになった。

昭和三十四年二月、耕地整理に伴なう水路を掘ったとき地中の家屋が出現し、男鹿市船川中学の磯村朝次郎氏によってその重要さが注意された。私が秋田城跡調査のおりこの遺跡を見たのは翌年八月のこと、伴出する土器が平安時代のものであるから、埋没家屋も同時期のものに相違なく、水路の岸に露出した板屋根の保存のよい状況から推して柱や桁や軒も完全であると思つた。類例のない平安時代の民家の実物として価値が大きく、その発掘調査を要望しておいた。その希望がかなって、最初の発掘は秋

男鹿市脇本埋没家屋平面図(下) 断面図(上) (永井規男氏実測)



田県と男鹿市の主催で昭和三十九年九月十
月に行なわれ、次いで四十年八月に二回目
の調査が行なわれ、私も参加した。

寒風山に登る舗装道路が脇本駅の東の踏
切りから北に走って七五〇メートルのこ
ろの左手が脇本字脇本飯ノ森で、右手が脇
本字富永小谷地である。小谷地では第一・
二次の発掘によって埋没家屋の板屋根が桁

に乗ったまま二ヶ所にあらわれた。桁を受
ける掘立て柱は二・八メートル間隔に立つ。
屋根板は厚い割り材の杉板で長さ約二メー

トル、幅約二〇センチである。桁は径一五
センチほどの丸太、柱は丸太か杉の割り材
で長さ約二・三メートルの例がある。柱を
地中一メートルの深さから立てると地上で
はわずかに一・三メートルで人のたけにも

及ばないから、これは側柱であろう。屋根
板の先端は尖らして削ってあるから地面か
土手に突き挿したらしく、屋根板の上に藁
を敷き、その上に厚く粘土を塗って固め、
屋根の押えにもしたらしい。屋内は当然壁

穴の床面であったはずで、そこから土器や
木器が発見される。水中に陥没したといっ
ても割に浅かったらしく、屋根の上半部は

大氣中に出ていたので早く失われ、下半部だけが水面（のちでは地下水面）以下にのこって保存されたのである。したがって棟木などがもとの形で発見されるのぞみは薄い。道路の西の飯ノ森からは家屋遺構は出なかったが、木器や木彫の馬、櫛、黒漆地に朱漆で山を描いた木製椀、鳥獣骨などが出土した。

二回の発掘によっても、地下水が多くて埋没家屋の床面の追求が困難で、その広さも確認されていない。つまり一棟の家の全形がまだつかめず、かまどや出入口、主屋と付属屋の関係、敷地の広さ、井戸の位置、当時の道、水田、林地などの問題もある。

土器形式から平安時代中ごろと推定されるこの辺境地域の農村の復原に役立つ実物資料が脇本付近一帯の水田の下に保存されている。江戸時代に米代川流域で発見されて平田篤胤や菅江真澄が記した十数棟の埋没家屋にも匹敵する遺跡である。じっくりと腰をすえた調査が今後とも続行される必要がある。 (福山)

① 奈良修介・磯村朝次郎「八郎潟周辺の遺跡」秋田県教育委員会編『八郎潟の研究』(昭和四〇年刊)所収。

② 船川中学校社会部編『男鹿年表』(昭和三二年二月刊)。

③ 磯村朝次郎「脇本飯森家屋埋没遺跡調査報告」『秋田考古』一八号(昭和三六年)男鹿市編『男鹿市史』(昭和三九年七月刊)四一—二頁。

④ 斎藤忠等「脇本埋没家屋第一次調査概報」『秋田県文化財調査報告書』第五集(同県教育委員会昭和四〇年四月刊)。

斎藤忠「埋もれた家屋と集落」『日本歴史』一九九号(昭和三九年二月)。

⑤ 磯村朝次郎「平安時代の埋没家屋」秋田県広報協会発行『あきた』三卷一—二号(昭和三九年二月)。

⑥ 類似の埋没家屋らしい遺構は当遺跡の南約〇・六六キロの男鹿市脇本字富永野田、北東約二・八キロの南秋田郡琴浜村福川上谷地の九番堤(俗称大堤)でも水路に現われている。北約四・五キロの琴浜村角間崎福田では木柱や須恵路・土鍾・炭化米を伴う堅穴住居跡(平安時代を降らない)が発見されている(注①参照)。

孟子の井田制についての一解釈

貝塚茂樹氏

予定) (発表内容は論文として近く本誌に掲載)

学界消息

読史会 昭和四十年秋季大会

一月三日(祝)午前九時〜午後五時

於、京大文学部第一講義室

「家牒」の成立 佐藤 宗諄

日本書紀后妃皇子関係記載の形式について

横田 健一

衛府と諸門 直木孝次郎

鎌倉幕府の陰陽道 村山 修一

土族民権における抵抗の理論 宮城 公子

關邪思想について 杉井 六郎

茅原華山の第三帝國論について 山岡 桂二

時の科学としての歴史学 酒井 忠雄

殯の構造 五来 重

〈西田直二郎先生追悼講演〉

西田先生の業績 原 隨園

西田先生の生涯と学問 柴田 実

東洋史談話会 大会

一月三日(祝)午前九時〜午後五時

於、京大法学部第七教室

カイドウの乱に関する一考察 恵谷 俊之

五代軍閥の刑獄機構と裁判 室永 芳三

宋代の都市分布に関する一考察 斯波 義信

大平天国期の農民運動の動向と太平天国との
関係について——江浙地方における——

孫文の民族主義

ヤズウズウ・オウル・アリに見える

カイトウの部族意識をめぐって

高昌国の胡語と胡書と胡俗

郡と庫

易の聖人と形而上の道

前後漢交臂期の叛乱

北齊書の顔之推伝の一節について

清朝の興起と山西商人

西洋史読書会 大会

一月三日(祝)午前九時〜午後五時半

於、京都大学楽友会館

Lá-kur-g-dab-g-ba 再考

——Sub-lingalを中心として——

ドナティズム運動の一考察

十字軍賄有とその意義について

一三九七年のドヴィナ行政法について

テンカスター期の財政危機
について

——ヘンリー六世治世の場合——

身分制領邦国家の行政と軍政

一五六三年労働規制法の成立

小島 晋治

小野川秀美

三橋富治男

嶋崎 昌

三田村泰助

板野 長八

木村 正雄

宇都宮清吉

佐伯 富

山本 茂

新田 一郎

河井田研郎

石戸谷重郎

尾野比左夫

中村賢二郎

田村 満穂

スチュアート前期における治安判事について

梶谷 宏義

思想上のサン・テヴルモン

ビエール・オーギュスト・モジエール

鈴木 泰平

ベルンライター文書と中欧経済同盟計画

三宅 正樹

昭和四一年度奨励研究の
公募について

次の要領で、昭和四一年度科学研究費補助金(奨励研究)の公募が行なわれますので、お知らせいたします。

一、目的 奨励研究は、大学等の研究機関に研究者として所属する者以外の者が行なう科学研究を助成し、奨励することを目的とする。

二、応募資格者

1、小・中・高等学校等の教員および教育委員会の所管に属する教育機関の職員

2、1以外の者で、科学研究を行なっている者、ただし学生、生徒および大学、高専等に所属する者を除く。

三、書類提出期間

昭和四一年五月九日(月)〜十四日(土)

四、応募用紙は、日本学術振興会(東京都千代田区神田一ツ橋一ノ二)に申込むこと。(一組四五百円)

なお、昭和四〇年度の交付状況は、採択課題数は二〇八件、一課題あたり平均交付金額は五万円程度の由です。

史林バックナンバーのお知らせ

次の各号は、若干残部がありますので、ご利用下さい。()内は定価、送料は定価一〇〇円まで二〇円、他は四〇円です。お申込は前金(切手代用可)にてお願いします。(なお、会員各位には、送料は当金にて負担いたします。)

- 三三卷一号・二号(各一〇〇)
- 三四卷一・二号(一四〇)・四号(二〇〇)
- 三六卷一号(一〇〇)
- 三八卷二号・三号・四号(各一〇〇)
- 三九卷三号・四号・五号(各一〇〇)・六号(二〇〇)
- 四〇卷六号(二〇〇)
- 四一卷三号、四号(一〇〇)・六号(二〇〇)
- 四二卷四号・五号・六号(各一八〇)
- 四三卷一号・六号(各一八〇)
- 四四卷一号・四号(各一八〇)・六号(二〇〇)
- 四五卷一号・六号(各二〇〇)
- 四六卷一号・六号(各二〇〇)
- 四七卷一号・二号(各二〇〇)・三号・六号(各二四〇)

四八卷一号・二号(各二四〇)・三号・六号(各三〇〇)

史林総目録(一・四〇卷)(二二〇)

隔葉記巻一―巻五(各二、〇〇〇)送料一
二〇)

新入会ご希望の方へ

史学研究会へ入会ご希望の方は、住所(史林送先)・氏名・専攻および送本開始希望巻号を明記の上、会費(一年六冊一、五〇〇円)を添えて、直接当会宛お申込下さい。(但し、学校・図書館等公機関は、会費後払でも結構です)ご入会の際、上記バックナンバーを併せてお申込下さって結構です。なおご送金はなるべく振替口座(京都五一五五番史学研究会)をご利用下さい。

委員会だより

- ◇ 四九巻一号をお届けいたします。今号もまた、まず刊行のおくれをおわびせねばならないのは、まことに見苦しいのですが、一・二号のうちに必らず挽回いたします。
- ◇ 本誌のバックナンバーの在庫状況は上

掲の通りです。お知りあいの方々へもご紹介下さい。近著の古書肆カタログによりますと、「一・四〇巻総目録」は相当な高値を呼んでいました。在庫品は、むろん正価販売です。

◇ 会費について、本号までの残高は同封振替裏面の「お知らせ」の通りです。赤字の方、残高の少ない方、よろしくお願いいたします(なお「お知らせ」の領収欄は、前号以後にご入金いただいた方のみに記入しています)

◇ 次号には、工藤敬一・寺田隆信・砂原教男・谷岡武雄・林巳奈夫・堤圭三郎・吉本堯俊諸氏の力作を掲載いたします。ご期待下さい。

史 林 (第四九巻第一号)

一九六五年二月二五日印刷
一九六六年一月一日発行 定価三〇〇円

発行所

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史 学 研 究 会

理事長 田 村 実 造
振替京都五一五五番

印刷所

京都市下京区西七条御所ノ内町五〇
中村印刷株式会社